



# 無人島に佇む旧野首教会堂



# 小値賀町

小値賀町

大小17の島々で構成されている小値賀町。そのうち集落があるのは小値賀島、斑島、黒島、大島、納島、六島の6つの島。近年、民泊が盛んになり「おもてなしの島」として知られ、全国から多くの観光客が訪れる。人口約2,600人。

小値賀町の本島である小値賀島。その東端から二キロメートル東に位置するのが野崎島だ。この島にも頭ヶ島天主堂を手掛けた鉄川與助が設計した教会堂がある。

小値賀島から野崎島へは一日に二便、町営船が出航している。現在は宿泊施設の管理関係者以外は無人となったこの島にも、かつては野崎、野首、舟森の三つの集落があり、昭和三十年代には六百五十人ほどの人々が暮らしていた。三つの集落のうち野崎集落の人々は神道を信仰し、野首集落、舟森集落の人々は神社の氏子を装いつつひそかに自分たちの信仰を続けた潜伏キリシタンであった。

島の中心部に位置する野首集落跡には、禁教期の潜伏キリシタン指導者の屋敷があり、解禁後は仮の聖堂とされ、その後、初代の野首教会堂が建設された。現在、小高い丘の上に建つレンガ造りの小さな教会堂は鉄川與助によって建て替えられたもので、彼が建てた初めてのレンガ造りの教会としても知られている。しかしながら外部には正面の屋根の両端にフランス王家の紋章であり、後期ゴシック建築に用いられたユリの花型の飾りを施すなど、初期のものとは思えない獨創性を発揮している。また頭ヶ島天主堂と同様に、その外観と内部とで印象が変わるのも特徴だ。堂内に一歩足を踏み入れると、木の温もりが感じられ、木彫りの装飾に目を奪われる。

小さいながらも荘厳なこの教会堂は、集落に住むわずか十七世帯の信徒たちによって建てられたという。貧しい中にあってなお信徒たちは生活を切り詰め、また力を合わせてキビナゴ漁などで資金を蓄えた。そうした彼らの姿を見ていた大工たちは、資金を支払ってもらえるか不安だったという。一九〇八(明治四十二年)、遂に教会堂が完成。建築費用は現在のお金に換算すると二億円ほどだったといわれている。落成の日、信徒たちはその全額を小銭で支払ったという。

戦後、島は過疎化が進み、一九七一年(昭和四十六)年に無人島となった。一時、荒れ果てていた旧野首教会堂は小値賀町が修復し、一九八九(平成元)年には長崎県の有形文化財に指定された。この島は今、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の「野崎島の集落跡」として、世界遺産の登録を目指している。